

# 大正～昭和戦中期における大阪児童愛護連盟 「赤ちゃん審査会」の活動実態と歴史的意義

Study of the activities for the children's growth and child-rearing by the Osaka Association  
for Child Nurturing from Taisho era to Showa Era during World War II

内田塔子  
UCHIDA Toko

## 要旨

本研究は、大正～昭和戦中期において、乳児死亡率が非常に高率であった大阪で活動をはじめ、全国に活動範囲を広げていった民間団体・大阪児童愛護連盟が、乳児死亡率の低減を目指して全国各地で開催した「赤ちゃん審査会」の活動実態の一端を明らかにするとともに、そこで実施された「メンタルテスト」の調査内容の分析を通じて「赤ちゃん審査会」の意義を再考することを目的とした。

本研究を通じて、「赤ちゃん審査会」が、子どもの身体検査を行い、優良児を表彰することで、子育て中の母親に目指すべきモデルを提示し、保健衛生や栄養等に関する正しい育児知識の普及啓発を目的とした活動の側面のみならず、以下の点を含むものであったことを指摘した。

(1) 当時の社会事業の対象とされなかった中産階級・健康な子どもに新たに焦点をあて、健康な子どもを疾病から守り、より健康にする予防的活動であったこと

(2) 母子と当時の子育て実態について、社会調査の手法を用いて客観的に把握する場としての意味があったこと

(3) 母子と当時の子育て実態のみならず、子どもの誕生や子育てに対する人々の関心・意識・考え方を直接把握する場としての意味もあったこと

連盟は、この「メンタルテスト」の結果から見てきた子どもの育ちと子育ての課題を、その後の児童愛護事業に生かした。これら3点において、大阪児童愛護連盟の「赤ちゃん審査会」は、この時代の民間団体の活動実態として先駆的なものであった。

キーワード：大阪児童愛護連盟 『子供の世紀』 「赤ちゃん審査会」 「メンタルテスト」 乳児死亡率

## 1. はじめに

本研究は、大正期に、乳児死亡率が非常に高率であった大阪で活動をはじめ、昭和戦中期にかけて全国に活動範囲を広げていった民間団体の大阪児童愛護連盟が、子どもの育ちと子育てに関するさまざまな問題の改善に向けてどのように活動を展開したか、その全貌を明らかにする研究の一部である。

そもそも大阪児童愛護連盟（以下、連盟）に着目する最大の理由は、その活動内容の公共性と先駆性にある。連盟は、1921（大正10）年10月に大阪で設立された民間団体であるが、設立当初から大阪のみならず、日本全体を視野に入れて事業を計画・推進していた。そのため、設立2年目から活動範囲は大阪にとどまらず、東京をはじめとして全国へ広がり、国レベル・地方レベルの行政、各地の社会事業団体・児童保護団体、新聞社、医師をはじめとした子どもに関わる専門家等と協力し、日本の子ども、時代によっては韓国・中国・台湾の子どもも対象とした児童愛護のための社会事業ともいえるような公共的な活動が展開されていた。

また連盟は、事業を計画・推進していくうえで、①従来の社会事業が主な対象としてきた「特別なニーズ」のある子どもに限定せず、「すべての子ども」を事業の対象としたこと、さらには、②母子保健・医療・教育・福祉・都市計画・子どもの遊び・文化芸術といった子どもの育ちに関わるすべての領域について、総合的に視野に入れていたこと、これらの点において、大変先駆的な活動を展開していた団体であったといえる<sup>1</sup>。

しかし、このように大正～昭和戦中期の子どもや子育てに関する研究をしていく上で重要な団体であるにもかかわらず、基礎資料である連盟機関誌『子供の世紀』の創刊から3年間の巻号の大部分の所在が確認できないこと、さらに現存する巻号を通読できる図書館が全国の大学図書館・公私立図書館で一館もないなど、研究の遂行上大きな制約があった<sup>2</sup>こともあり、いくつか重要な先行研究<sup>3</sup>はあるものの、連盟の活動実態の全容を明らかにする研究が進展しているとはいえない状況にある。

そこで本稿では、連盟の中心事業である「赤ちゃん審査会」に着目し、特にそこで実施されていた「メンタルテスト」<sup>4</sup>と呼ばれるアンケート調査に焦点をあて、そこから見えてくる連盟の活動実態の一端を明らかにするとともに、「赤ちゃん審査会」の意義を考察することとする。

研究方法としては、1923（大正12）年5月に創刊され、1944（昭和19）年4月に終刊となった連盟機関誌『子供の世紀』（月刊）を基礎資料として、「メンタルテスト」について扱う全論考をピックアップし（以下の表を参照）、その内容を検討した。

### 【母親の「メンタルテスト」結果を取り扱っている『子供の世紀』掲載論考リスト】<sup>5</sup>

著者名：①②④～⑧は余田忠吾（大阪市立産院院長、医学博士）③は記載なし ⑨～⑳⑳は伊藤悌二（連盟主事）

巻-号	年	タイトル
① 3-11	1925	大正14 第三回大阪赤ん坊審査会尋問答案調査表
② 4-8	1926	大正15 文字に現はれたる婦人の覚悟
③ 4-8	1926	大正15 東京赤ちゃん審査会概評
④ 4-9	1926	大正15 文字に現はれたる婦人の覚悟（二）
⑤ 4-10	1926	大正15 文字に現はれたる婦人の覚悟（三）
⑥ 4-11	1926	大正15 第四回赤ん坊審査会に於ける調査
⑦ 4-11	1926	大正15 文字に現はれたる婦人の覚悟（四）

⑧4-12	1926	大正15	啼叫児に対する母親の注意—第三回赤ん坊審査会に於ける調査—
⑨9-3	1931	昭和6	母親のメンタルテスト—昭和6年1月13日過程を思ふ日 大阪中央放送局より放送の婦人講座—
⑩11-1	1933	昭和8	母親のメンタルテスト—出産時の信仰・迷信・記念事業・命名の由来—
⑪11-3	1933	昭和8	母親のメンタルテスト(二)—子供の病気・補助栄養品・妊娠時の父母の年齢・つわり—
⑫11-4	1933	昭和8	母親のメンタルテスト(三)—妊娠中の病気、産婆か入院か、産後の病気—
⑬11-7	1933	昭和8	母親のメンタルテスト(四)—お産の時の費用、家の間敷と庭の坪数、住居の方向と家賃—
⑭15-1	1937	昭和12	東京の審査会に於ける母親のメンタルテスト(一)—出生順位、名前の由緒、名付主、出生記念—
⑮15-2	1937	昭和12	母親のメンタルテスト(二)—子供の病気・補助栄養品・妊娠時の父母の年齢・つわり—どんな病気に罹ったか、母乳代用品、子供が宿った時の両親の年齢、お産は誰の手で生まれたか—
⑯15-3	1937	昭和12	東京の審査会に於ける母親のメンタルテスト(三)—妊娠中のつわり、妊娠中の病気—
⑰15-4	1937	昭和12	東京の審査会に於ける母親のメンタルテスト(四)—お産の場合、産後の発熱、お産の時のおまじない、お産の時の費用—
⑱15-5	1937	昭和12	東京の審査会に於ける母親のメンタルテスト(五)
⑲15-6	1937	昭和12	東京の審査会に於ける母親のメンタルテスト(六)
⑳15-7	1937	昭和12	大阪の審査会に於ける母親のメンタルテスト(一)
㉑15-9	1937	昭和12	大阪の審査会に於ける母親のメンタルテスト(二)
㉒15-10	1937	昭和12	大阪の審査会に於ける母親のメンタルテスト(三)
㉓15-11	1937	昭和12	大阪の審査会に於ける母親のメンタルテスト(四)
㉔15-12	1937	昭和12	大阪の審査会に於ける母親のメンタルテスト(五)
㉕16-4	1938	昭和13	第九回全東京乳幼児審査会(1937年昭和12年)に於ける母親のメンタルテスト(一)—出生順位、命名の由来、命名者—
㉖16-5	1938	昭和13	第九回全東京乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト—出席記念事業、母乳代用品、お産の経路、使用歯磨—
㉗16-6	1938	昭和13	第九回全東京乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト(三)—産時のまじない、生月表—
㉘16-10	1938	昭和13	第九回全東京乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト—妊娠中の病気、産後の発熱、つわり—
㉙16-12	1938	昭和13	第九回全東京乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト(其の四)—本誌6月号より続く—
㊱17-9	1939	昭和14	第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト—産時のまじない—
㊲17-10	1939	昭和14	第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト—出産の記念事業—
㊳17-12	1939	昭和14	第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト(三)
㊴18-2	1940	昭和15	第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト(四)
㊵19-1	1941	昭和16	第十一回全東京乳幼児審査会お母さんのメンタルテスト結果
㊶19-2	1941	昭和16	第十一回全東京乳幼児審査会お母さんのメンタルテスト結果(二)
㊷19-3	1941	昭和16	第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタル・テスト結果(五)
㊸19-5	1941	昭和16	第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタル・テスト結果(六)
㊹19-7	1941	昭和16	第十二回全東京乳幼児審査会に於ける母親のメンタルテスト結果(一)

なお、『子供の世紀』に掲載されている「赤ちゃん審査会」報告や「メンタルテスト」の調査結果の引用にあたっては、個人が特定されることで人権が侵害されないよう個人情報の扱いには特に配慮した。

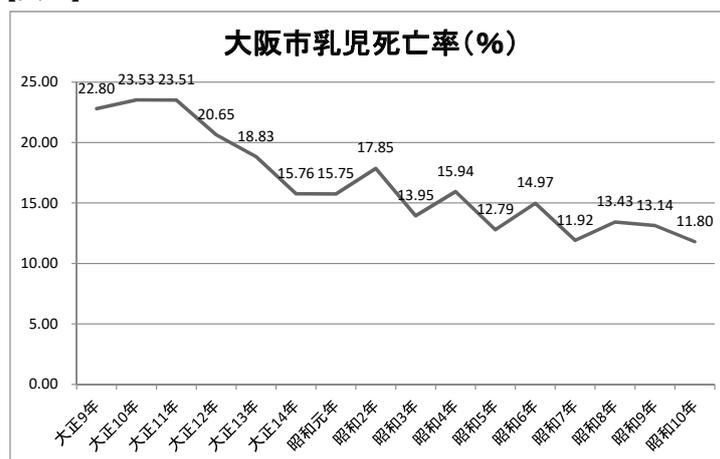
## 2. 大阪児童愛護連盟設立の社会的背景と事業展開

### (1) 連盟設立の社会的背景

連盟が設立される当時の大阪は、工業化にともなう公害や急激な人口増加による劣悪な住環境の中で、子育てをめぐる生活環境は深刻な状況にあり、乳児死亡率が高率であった【図1】【図2】。それにくわえて、「まだまだコドモは、或は看過せられ、或は玩弄視せられ、甚しきに至っては虐待さへせられて」<sup>6</sup>おり、仮に「真面目にコドモのためを計るつもりでも、其の方法を弁へなかつたり、或はこれを誤ったりして、却ってコドモの幸福を脅し、その発達を阻害しているものも少なからずあ」<sup>7</sup>るような状況であった。

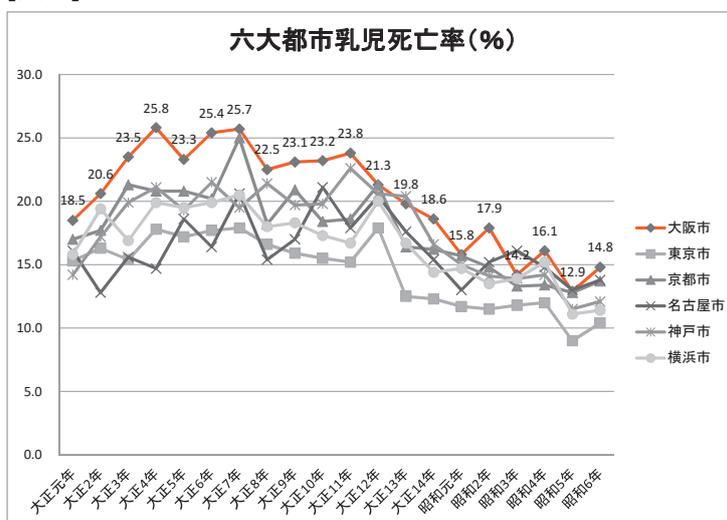
このような社会状況を変革し、「子供は生れ乍らにして愛護さる可きもの」<sup>8</sup>という認識のもと、親やその他一般の人々に子育てに関する正しい知識の普及と、子どもや子育てに対する大人の意識啓発を目的として、三田谷啓らの提案で、大阪市立北市民館の志賀志那人館長らが中心となり、1921（大正10）年10月5日に設立されたのが、大阪児童愛護連盟である。

【図1】



「大阪市統計」『子供の世紀』（第15巻第1号、62頁、1937年）より筆者作成

【図2】



「大阪市保健部発行保健月報」『子供の世紀』（第15巻第1号、62頁、1937年）より筆者作成

## (2) 連盟の事業展開

大阪児童愛護連盟規約によれば、連盟は「児童の福祉増進を奨励しその実現を図る」ことを目的として、以下の7事業を行うものとされている。

<p>大阪児童愛護連盟</p> <p>大阪市北区天神橋六丁目 市立北市民館内</p>	<p>大阪児童愛護連盟規約 (抄)</p>	<p>一、名称 本連盟ヲ大阪児童愛護聯盟と称ス</p> <p>一、事務所 大阪市立北市民館ニ事務所ヲ置ク</p> <p>一、目的 本連盟ハ児童ノ福祉増進ヲ奨励シ其ノ実現ヲ図ルヲ以テ目的トス</p> <p>一、事業 本連盟ハ右ノ目的ヲ達スル為ニ左ノ事業ヲ行フモノトス</p> <p>(一) 児童愛護宣伝デーノ举行</p> <p>(二) 児童ノ教養愛護ニ関スル冊子 聯盟機関雑誌「子供の世紀」ノ発行</p> <p>(三) 講演及講習会ノ開催</p> <p>(四) 展覧会ノ開催</p> <p>(五) 乳幼児審査会ノ開催</p> <p>(六) 児童ノ福祉増進ニ関スル調査</p> <p>(七) 其他児童ノ福祉増進ニ関シ必要ナル事業</p> <p>(以下、略)。</p>
--	-----------------------	---

(「大阪児童愛護連盟規約」『子供の世紀』第6巻第9号、93頁、1928年)

「児童愛護宣伝デー」事業は、連盟設立初年の1921（大正10）年11月に大阪で初めて举行され、翌年の1922（大正11）年5月には、大阪のほか、東京・京都・神戸・広島でも行われ、全国各地に広がった事業で、おおよそ3日間設定された。期間中は、児童愛護のポスターやビラの頒布等によって児童愛護を宣伝するとともに、子どものためにお伽噺の会、活動写真会を開催したり、大人向けに夜間に児童問題・児童愛護をテーマにした講演会・映画会を開催したりするなど、子どももおとなも対象にした行事がおこなわれた。

「児童の教養愛護に関する冊子」事業としては、連盟機関誌『子供の世紀』を月1回、1923（大正12）年5月の創刊から戦況の悪化とそれにとまなう物資不足の影響で自ら終刊の道を選ぶことになる1944（昭和44）年第22巻第4号までの21年間、休まず発行を続け、連盟の児童愛護のための諸活動についてまとめた論考や活動記録を掲載する他、大正期から昭和戦中期における国内外の子どもの問題状況に関する実態調査の紹介、保健衛生・医療・非行・教育・保育・遊び・文化芸術活動など幅広い領域の専門家や実践家等から寄せられる子育てに必要な情報、読者の声、「赤ちゃん審査会」の運営をサポートしたボランティア女学生の感想、子ども向けの読み物等実に多岐にわたる内容を読者に届けた。『子供の世紀』は、硬軟織り交ぜた他に例を見ない「子ども総合情報誌」であったといえる<sup>9</sup>。

「講演会・講習会」事業は、子育て中の親に対する児童愛護精神の啓発と、乳幼児の衛生（病気の

予防、早期発見、応急処置、治療、看護法等) や栄養に関する正しい育児知識の普及を目的として、全国の「児童愛護宣伝デー」や「児童愛護週間」で開催された。

「展覧会」事業では、例えば、「赤ちゃん審査会」で母親から「優良なる人工栄養品、被服、薬品、医療器、玩具及び口腔衛生用品」に関して多く質問されたことをうけて、「学問と実際に基ける優良コドモ必需品展覧会」<sup>10</sup>を開催し、専門家による実験データなど客観的資料とともに、子どもの成長にとってよりよい子ども用品を展示し、子育て中の親に、どの会社の子ども用品を購入するのが望ましいかを知る機会を提供するなど、子育て中の親のニーズを捉えた企画の展覧会を開催していた<sup>11</sup>。

「乳幼児審査会」(本稿では、以下『赤ちゃん審査会』と表記する) 事業は、連盟設立2年目の1922(大正11)年に大阪で始められ、徐々に全国各地に拡大していった。日本が植民地支配をしていた時代はソウルや台湾でも開催されていた。【図3】

審査会では、医師による乳幼児の体格検査が行われ、健康優良児の表彰、母親への問診等が行われた。審査会の会期中には育児相談所が設けられ、母親から子育てに関する相談を受けた。また、「赤ちゃん審査会」に参加する母親を対象にアンケート調査を実施し、調査結果を『子供の世紀』で公表していた。アンケート調査については、「児童の福祉増進に関する調査」事業の一環として位置づけられていたと考えられる。詳細については次項以降に譲る。

このように、連盟は設立当初より、日本社会全体の子どもの福祉増進を実現すべく多様な事業を展開し、年を追うごとに事業を全国へ拡大させていった。

【図3】

●赤ちゃん審査会開催地一覧

開催地 ／年	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943
	T11	T12	T13	T14	T15/ S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18
大阪	1		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
堺						1																
五條							1	2	3	4	5											
岸和田							1															
神戸							1															
和歌山										1												
別府		1																				
東京				1	2	3					4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
北海道						1																
京城							1															
中京											1											
台湾														1								

数字は第○回

3. 「赤ちゃん審査会」事業の概要

連盟の各事業の中でも、とりわけ重きを置かれたのが「赤ちゃん審査会」事業である。前述のように、審査会当日は、医師による乳幼児の体格検査や母親への問診、育児相談活動、健康優良児の表彰<sup>12</sup>等が行われるものであったが、単にそれで終わりというものではなかった。連盟は、従来の社会事業に足りない新たな視点で審査会を開催していると自負していた。

## (1) 「赤ちゃん審査会」の目的

まず連盟主事の伊藤悌二は、「赤ちゃん審査会の使命」として、以下のように述べている。

(前略) 審査会は、唯単に赤ん坊を大勢集めてお祭り騒ぎをし体重、身長、胸囲、頭囲等の優れている者を表彰して事終れりとするものではない。(中略)

然し斯くの如き催しを継続する理由は健全なる国家社会を形成し、第二の優秀なる国民を一人にても多く輩出せしめんために外ならぬのであって、健全な子供を生み且育て上げるのは母親たる人々の責任の重大なるものである事と信じ、審査会に出席なさるお母様方に育児上参考となるべき質問をなして来たのである。

斯様にして後ちより来る若き婦人達の参考資料となし如何にせば健康なる子供を育て上げる事が出来るかと云う羅針盤となす事を得ばこれに優る幸福はないと信ずるものである。<sup>13</sup>

このように連盟は、健全な国家の形成のために「第二国民」である子どもを、健康で優秀な子どもに育てることを「赤ちゃん審査会」の使命とし、その重責を担う母親を教え導きサポートしていくことを目的として「赤ちゃん審査会」を開催していた。

## (2) 「赤ちゃん審査会」の対象

さらに伊藤は以下にあるように、従来の社会事業は、病気や貧困に直面し、救済を必要とする人を対象として行われてきたが、それでは「消極的」であり、これからの社会事業は、健康ではない状態を健康な状態にもっていく事業だけではなく、健康な状態をより健康な状態にしていくような「積極的」な事業が求められるとした。そのため、「赤ちゃん審査会」は、健康な子どもを対象とし、中産階級の人々を中心に、あらゆる階級の人々が参加していた。

(前略) 今日までの社会事業は病弱者とか貧窮者とかが相手で、どうしても手のつけようのない境遇の人々を救うと云う極めて消極的のものであったが、将来の社会事業は結核予防とか、防貧事業とか云う、其の場、其の場の間に合せでは物足りない、即ち応急手当と云うものはさして効果を奏さぬ場合が多い、将来の意義ある事業は積極的に健康をモット健康に「まづ健康」でなく「より健康に」と云う事を標語として進まなければならぬ<sup>14</sup>。

(前略) 国家の基礎は中産階級の人々であって、此の中堅智識階級の将来は国家の消長に関係あると信ずるものである。

今日まで本連盟主催の乳幼児審査会に参加せる人々は、主として中産階級の人々で (後略)<sup>15</sup>

(前略) 先ず第一に認められる特徴は、極めて質素な、所謂こじんまりした生活から豪壮な邸宅式生活を営むものまで網羅されていることでしょう。それは本連盟の審査会が単に或る指定階級の人々をのみ対象とするものでなく、実に広く即ち全大阪一円に住むあらゆる階級によって認められ支持されている事を証拠立てるものに外なりません。(中略)<sup>16</sup>

連盟は、日本社会の将来を見据え、確固たる国家の礎を築くためには健康な子どもを育てることが必須であると認識し、それを実現していくためには子育ての中心的役割を担う母親が鍵であると考え、「赤ちゃん審査会」事業を連盟の中心的事業に位置づけ、子どもの身体検査の他、「審査会」で母親への問診、育児相談活動を行い、子育てに有益な情報をシェアした。

## 4. 「メンタルテスト」と「メンタルテスト」がカバーする調査項目

「メンタルテスト」とは、連盟の中心事業である「赤ちゃん審査会」の会場で、審査会に参加して



「小泉厚相と赤ちゃん審査会」(第14回全東京赤ちゃん審査会場)  
 (絵・小川武、『子供の世紀』第20巻第8号、43頁、1942年)

いる母親を対象に行われたアンケート調査<sup>16</sup>のことである。妊娠・出産期から出産後の育児実態を把握することを目的として行われた。

現存する『子供の世紀』で「メンタルテスト」の調査結果が確認できるのは、以下の「赤ちゃん審査会」で実施されたものである。

年	場所	メンタルテストを実施した「赤ちゃん審査会」名称	前掲論考リスト番号
1925 (大正14)	大阪	第三回赤ん坊審査会	①②④⑤⑦⑧⑨※
1925 (大正15)	東京	第二回東京赤ちゃん審査会	③
1925 (大正15)	大阪	第四回あかんぼ審査会	⑥
1930 (昭和5)	大阪	第八回赤ん坊審査会	⑨※
1932 (昭和7)	大阪	第十回記念大阪あかんぼ審査会	⑩～⑬
1936 (昭和11)	東京	第七回 <sup>17</sup> 全東京乳幼児審査会	⑭～⑰
1936 (昭和11)	大阪	第十四回 <sup>18</sup> 全大阪赤ん坊審査会	⑳～㉒
1937 (昭和12)	東京	第九回全東京乳幼児審査会	㉓～㉖
1938 (昭和13)	大阪	第十六回全大阪乳幼児審査会	㉗～㉙、㉛㉜
1939 (昭和14)	東京	第十一回全東京乳幼児審査会	㉚㉛
1940 (昭和15)	東京	第十二回全東京乳幼児審査会	㉞

※⑨は第三回赤ん坊審査会(大阪)、第八回赤ん坊審査会(大阪)双方について触れている。

## 第一回奈良五條町の乳幼児審査會



背後に立つて居るのは五條町婦人團體の幹部たちであつて、支那婦人も愛兒を連れて參加したのはいかにも國際的である。(上圖は口腔審査の一室)

「第一回奈良五條町の乳幼児審査會」  
(『子供の世紀』第6巻9号、口絵3、1928年)

前述の表にある全11回の「赤ちゃん審査会」で行われたメンタルテストの全設問項目の調査結果が掲載されているわけではないが、掲載されている範囲内で設問項目をまとめると、以下の通りである。

### ①参加者の属性に関するもの（フェイスシート）

- ・参加者の居住地域
- ・参加者職業
- ・母親の年齢
- ・長男長女出生当時の父親・母親の年齢
- ・男女児年齢
- ・住居の間敷・畳の枚数・庭の坪数
- ・住居の方向と家賃

### ②妊娠中に関するもの

- ・妊娠したときの父母の年齢
- ・妊娠中の悪阻の有無（いつ・何日間）
- ・妊娠中の病気の罹患の有無（脚気、腎盂炎、腎臓炎、発熱等）

### ③出産前後に関するもの

- ・ 出産方法  
「お産は産婆だけの手で生れなさいましたか」(産婆・産院・病院等)
- ・ 病気の罹患の有無 (母親について・子どもについて)
  - －産後2週間以内に母親が発熱したか (何度・何日間)
  - －子どもが病気 (風邪、消化不良、中耳炎、胃腸病、百日咳、麻疹、気管支炎、湿疹、乳児脚気、初生児黄疸、水痘、眼病、肺炎他) になったことがあるか。(いつ・病名)
- ・ 母乳と代用品
  - －母乳が十分だったか
  - －母乳が不足した時、何で代用したか (牛乳、牛乳と重湯、市販粉ミルク、ラクトーゲン、重湯、キノミール、パトローゲン、牛乳と米粉、牛乳と果汁、スープ等の回答)
- ・ 出産にまつわる信仰・迷信  
「お産の時何かおまじないをなさいましたか、なさいましたらどんなおまじないでしたか」
- ・ 出産記念  
「初めてのお子さんがお生れになった時記念にどんなことをなさいましたか」(貯金・保険加入・記念撮影・記念植樹・親戚友人を招き馳走する・記念品購入他)
- ・ 出産費用 (妊娠中の費用を除く、出産から1カ月の間に支出される金額)
  - －①赤ん坊の衣服及蒲団費 ②産婆の礼金 ③産後の祝費 ④宮詣り費」(円単位)
- ・ 子どもの名前の由来
  - －誰がつけたか
  - －何に因んでつけたか

### ④子育てに関するもの

- ・ 主たる保育者
  - －誰が保育者 (子守) だったか (母親 (約八割五分)・祖母 (一割五分)・雇女 (五分弱)
- ・ 父親の酒量 ((不飲・少量・一合乃至五合以上) と子どもの身体発育 (優良児・普通児・劣等児) との関係)
- ・ 母親の子ども・子育て等に関する意識・認識
  - －生まれて四五日迄の子どもが泣きやまない時何に注意するか
  - －「我儘気質の強い剛情な六七歳の女兒又は男児が自分の望みが許されないで親の意に反対して啼泣するとき一番都合よくおさむる手段はどうしますか」
  - －「お子さんを育てる上に於てどんな病気を特に用心していますか」(感冒・疫病・消化不良他)
  - －「あなたが仮りに次の様な三人の子供をもつとして、
    - ①五歳の達者な賢い男児
    - ②三歳の盲目の弱い女兒
    - ③生後一か月の達者な男児この内一人だけ助けることが出来るとすればどれを助けますか」
  - －「事業に失敗して家及財産を失い次で愛児も失い又良人を失った三十前後の婦人の身になって考えるならどんなになされますか」
- ・ 子育てにまつわる社会への要望
  - －「お子さんを丈夫に育て或いは病気から護るに就てどんな社会施設があればいいとお望みですか？」

### ⑤その他

- ・ 眼・顔・性質・体格・顔型・口・鼻・耳・眉は、父親・母親のどちらに似ているか
- ・ 次の中で好きな色 (黒色、赤色、紫色、緑色、灰色、青色、桃色、黄色、白色)
- ・ 海と山とどちらを好むか (海・山・両方)

連盟は、妊娠・出産期から出産後の子育て実態を把握する上で、実に多様な視点を持っていた。それは、単に子どもの健康維持のために必要な、疾患や栄養面に関する知識や、出産や保育の実態を問うだけでなく、「出産記念に何をするか」「子どもの名前の由来」を問うことで、子どもの誕生に対す

る人々の意識にも注目していた。

## 5. 「赤ちゃん審査会」活動の歴史的意義

そもそも「赤ちゃん審査会」は、乳幼児死亡率の低減を目指して、子どもの身体検査を行い、優良児を表彰することで、子育て中の母親に目指すべきモデルを提示し、正しい育児知識を普及していく啓発活動の側面があったが、今回の研究から、新たに以下の点を「赤ちゃん審査会」の歴史的意義として指摘できる。

第一に、連盟は、従来の社会事業が対象としてきた「疾病や貧困など特別なニーズのある子どもと親」のみならず、健康で平均的・一般的な家庭、いわゆる中産階級の子どもと親も対象とすることで、それまで支援の対象とならず看過されてきた層に支援の焦点をあてた。「赤ちゃん審査会」は、社会事業においても意識されつつあった「予防的観点」（健康な子どもを疾病から守り、より健康にするという点）を重視し、積極的に活動する先駆的な側面があった。これは、「特定の子どもの保護・救済」を意図した戦前の社会事業から、「すべての子ども」をその対象とするようになる戦後の児童福祉への歴史的転換に連なる先駆的事业であったといえる。

第二に、「赤ちゃん審査会」は、連盟が乳幼児死亡率を目指して、さまざまな児童愛護事業を展開し、社会改革を実現していくために、同事業の対象となる母子と当時の子育ての実態を、「メンタルテスト」という社会調査の手法を用いて客観的に把握する場としての意味もあった。

特に、母子と当時の子育ての実態把握の中には、保健衛生や栄養といった必須の育児知識の有無や子育て実態のみならず、子どもの誕生・子育て等に対する人々の関心・意識・考え方が、乳幼児死亡率の低減を目指す上で重要であると認識し、「赤ちゃん審査会」がそれらを直接把握する場として活用された。以上から、「赤ちゃん審査会」が児童保護施策の策定・推進の前提となる実態・意識の把握のための新たな調査手法を提起したといえる。

このように、連盟の「赤ちゃん審査会」は、健康診断、優良児を育てるための啓発活動の枠にとどまらず、「メンタルテスト」を用いて、すべての子どもにとってよりよい社会を実現するための科学的根拠となるデータを収集する先駆的な調査活動でもあったことがわかる。連盟は、この「メンタルテスト」の結果を分析し、支援対象である親子の実態を客観的に把握することを重視し、そこで見えてきた課題を事業内容に生かした。

## 6. おわりに

大阪児童愛護連盟は、社会調査の手法を用いて、国家の基礎となる「第二国民」である子どもの妊娠・出産・子育ての実態を把握しようとした。

当時の社会事業は、慈善事業の段階から移行して、専門的・科学的アプローチにより実践を発展させようとしていた。「赤ちゃん審査会」における「メンタルテスト」を用いた実態調査活動は、このような時代の流れを先取りした先駆的なものであった。

大正デモクラシー期にはじまり、戦時下の困難な時局に直面しても、社会の変化に対応しながら、

一貫して児童愛護の観点から、「赤ちゃん審査会」および「メンタルテスト」の実施により、常に子どもと子育て状況を客観的に把握しようと努め、科学的根拠に基づき問題解決のために必要な支援事業を実行に移していく大阪児童愛護連盟の子ども支援活動は、この時代における民間団体の活動実態として特筆に値するといえる。

## 注

- <sup>1</sup> 連盟の活動の先駆性については、拙稿を参照。内田塔子「大正後期から昭和初期における子どもの権利保障活動の萌芽に関する研究－『大阪児童愛護連盟』の機関誌『子供の世紀』（第3巻第2号～第5巻第12号）を手がかりに－」、『ライフデザイン学研究』第7号、2012年
- <sup>2</sup> しかし2015年12月に六花出版より復刻版『子供の世紀』が順次刊行されている。これにより多様な専門領域の歴史研究が各段に進めやすくなり、今後さらに進展することが期待できる。
- <sup>3</sup> 先行研究については、文末の参考文献を参照。
- <sup>4</sup> 連盟が「赤ちゃん審査会」で参加者の母親に対して行う「メンタルテスト」は、いわゆる「知能検査」の類ではなく、妊娠・出産から子育て全般に関する実態と意識を尋ねるアンケート調査のことであった。「メンタルテスト」という呼称は連盟が名づけたものではなく、新聞社が名づけたもので、それに従ったままであると記されている。（伊藤悌二「母親のメンタルテスト—昭和6年1月13日過程を思ふ日 大阪中央放送局より放送の婦人講座—」『子供の世紀』第9巻第3号、4ページ、1931年）
- <sup>5</sup> 現在確認できるすべての『子供の世紀』から作成したが、とりわけ創刊から3年間に刊行された『子供の世紀』の大部分が散逸しているため、未見の論考があると思われる。
- <sup>6</sup> 「大阪児童愛護連盟趣旨」『コドモ愛護』12年7月号、1頁、1923年
- <sup>7</sup> 同注3
- <sup>8</sup> 伊藤悌二「人格の尊厳に着眼せよ」『子供の世紀』第3年第2号（大正14年2月号）、5頁、1925年
- <sup>9</sup> 拙稿「解説『子供の世紀』の特徴とその意義」（復刻版『子供の世紀』第1巻、六花出版、2015年）において、『子供の世紀』の内容をより詳細に紹介し、その特徴と意義を考察している。
- <sup>10</sup> 「学問と実際に基ける優良コドモ必需品展覧会の趣旨」『子供の世紀』第6巻第3号、2-3頁、1928年
- <sup>11</sup> 例えば第9回全東京乳幼児審査会の中で行われた「コドモ優良必需品展覧会」（昭和12年7月26日～31日、於：高島屋）には、ライオン歯磨本舗小林商店（ライオン歯磨）、保証牛乳株式会社（保証牛乳）、中央製菓株式会社（カルケット）、明治製菓株式会社（明治コナミルク・パトローゲン）、大木合名会社（パパー・慈童）、第一徴兵保険株式会社、田邊元三郎商店（ハリバ・エビオス・アスコル末）、大川式吸入器本舗（大川式吸入器・大川パーコー）、武田長兵衛商店（ロロン）、寶製菓株式会社（パーキュロ）、和光堂本店（シッカロール・キノミール〔母乳代用品〕・滋養糖）といった会社が自社製品を出品している。（『子供の世紀』第15巻第9号、76頁、1937年）
- <sup>12</sup> 例えば『子供の世紀』第4巻第11号（16頁、1926年）に転載されている大阪朝日新聞記事によれば、「第四回あかんぼ審査会」（大阪、大正15〔1926〕年9月16日～20日）に参加した満2歳以下の健康な乳幼児2181人のうち、入賞者は男児730人、女児429人の合計1159人にのぼり、全体の53%（※本文では63%とあるが53%の誤りと思われる）で前年度38%から大幅上昇し、そのうち最優良者が409人、次の優良者が366人もあったとのことである。
- <sup>13</sup> 伊藤悌二「母親のメンタルテスト—昭和六年一月十三日過程を思うの日 大阪中央放送局より放送の婦人講座—」『子供の世紀』第9巻第3号、3頁、1931年
- <sup>14</sup> 同上、4頁
- <sup>15</sup> 伊藤悌二「母親のメンタルテスト（四）—お産の時の費用、家の間敷と庭の坪数、住居の方向と家賃—」『子供の世紀』第11巻第7号、2頁、1933年

- <sup>16</sup> 伊藤悌二「第十六回全大阪乳幼児審査会に於ける母親のメンタル・テスト結果（六）」『子供の世紀』第19巻第5号、54頁、1941年
- <sup>17</sup> 『子供の世紀』第6巻第9号（1928年）に掲載されている本宮弥兵衛（同志社大学教授）の論考「幼児のメンタルテスト」によれば、「メンタルテスト」には、①知能測定を目的とするものと、②知識測定を目的とするものがあるとされている。これに従えば、連盟が実施する「メンタルテスト」は②にあたる。
- <sup>18</sup> 論考リスト⑭—⑲には東京の第何回目の審査会なのか明記はないが、メンタルテストを実施した審査会の翌年に調査の集計結果が掲載されることが多いことに鑑みると、この審査会と推測される。
- <sup>19</sup> 論考リスト⑳—㉔には大阪の第何回目の審査会なのか明記はないが、注19同様に推測すると、この審査会と推測される。

## 参考文献

- ①右田紀久恵編『都市福祉のパイオニア 志賀志那人 思想と実践』和泉書院、2006年
- ②森田康夫『地に這いて：近代福祉の開拓者・志賀志那人』大阪都市協会、1987年
- ③堀田穰「『子供の世紀』と児童愛護連盟」、125-140頁、参考文献①に所収
- ④和田典子「大阪児童愛護連盟の機関誌『子供の世紀』について—創刊・終刊を中心とした書誌事情とその位相—」『近畿福祉大学紀要』Vol.7（2）、187-192頁、2006年
- ⑤和田典子「乳幼児健診の起源としての大阪児童愛護連盟「赤んぼう審査会」について：大正期大阪市の乳幼児保護施策を背景として」、『近大姫路大学教育学部紀要』（7）、195-204頁、2014年
- ⑥内田塔子「大正後期から昭和初期における子どもの権利保障活動の萌芽に関する研究—『大阪児童愛護連盟』の機関誌『子供の世紀』（第3巻第2号～第5巻第12号）を手がかりに—」、『ライフデザイン学研究』第7号、2012年

## Study of the activities for the children's growth and child-rearing by the Osaka Association for Child Nurturing from Taisho Era to Showa Era during World War II

UCHIDA Toko

This study aimed to clarify the facts of “the Healthy Baby Contest”, which had been held to reduce the infant mortality rate by the Association of Osaka Child Protection, whose activities were started in Osaka and spread nationally from Taisho Era to Showa Era during World War II, and also aimed to reconsider the meanings of “The Healthy Baby Contest” by analyzing the results of the questionnaire surveys called “Mental Test”.

By this study, it became apparent that the awards of healthy babies had not only served to indicate the ideal mother to aim for and to disseminate accurate information about child rearing such as sanitation and nutrition, but also had some other implications, including the following:

- (1) “The Healthy Baby Contest” placed a new focus on children of the middle class, thus serving to protect healthy children against diseases and make them healthier.
- (2) “The Healthy Baby Contest” provided the opportunities to understand the situation of child rearing, by means of sociological research about children and their mothers.
- (3) “The Healthy Baby Contest” also provided the opportunities to understand the public attitudes to child birth and child rearing at that time.

The Osaka Association for Child Nurturing had made use of the research results in their projects for improving the situation of children.

With these three implications, “the Healthy Baby Contest” of the Association could be considered to be a pioneering activity lead by a private organization.

**Keywords** : The Osaka Association for Child Nurturing, “*The Century of the Child*”, “The Healthy Baby Contest”, “Mental Test” (questionnaire survey), infant mortality rate